

## グーテンベルク聖書の「創世記」24章50-52節

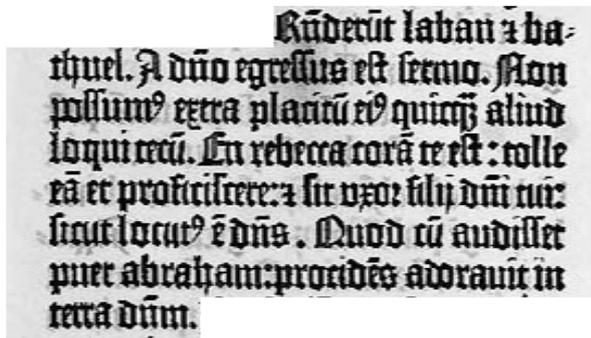
## Genesis 24 : 50-52 of the Gutenberg Bible

兵頭俊樹

Toshiki HYODO

2008年10月3日受理

グーテンベルク聖書は13-14世紀のバリ聖書写本の本文を印刷したと考えられている<sup>1)</sup>。中世の写本には文字の省略が多いが、グーテンベルクはこれもそのまま活字として取り入れているという。創世記24章50-52節の内容に関しては別に述べたので、本稿では、略字・縮約形・合字を含めた文字の同定から始め、必要最小限の文法、テキストの異読などを扱いたい。



コピーの行に対応させてローマン体で示す<sup>2)</sup>。1)-8)は行数。50-52は創世記24章中の節の番号。下線は略されている綴りを示す。

- 1) 50 Responderunt laban et bathuel.
- 2) thuel. A domino egressus est sermo. Non
- 3) possumus extra placitum eius quicquam aliud
- 4) loqui tecum. 51 En rebecca coram te est: tolle
- 5) eam et proficiscere: et sit uxor filij domini tui:
- 6) sicut locutus est dominus. 52 Quod cum audisset
- 7) puer abraham: procidens adorauit in
- 8) terra dominum.

縮約形や略字や合字で頻出するものを最初に列挙する。

- A) 母音の上にある横線は、鼻母音のmまたはnがその母音の後にあることを示す。
- B) 子音の上にある横線は、その子音の前後に文字が省略されていることを示す。
- C) 1) etは数字の7に横棒がついたような略字。
- D) 2) egressusの語尾のsに対して、語中(語頭も)の縦長のsがある。fと極めてよく似ているが、fの横棒が縦の線から右にはみ出さない形である。

- E) 5) uxorのrは、数字の2が跳ねているような別形である。
- F) 3) possumusのpoはpの右側の丸みとoの左側の丸みが重なった合字。また語尾のusは数字の9に似た略字。
- 7) adorauitのdoもdの右側とoの左側の丸みが重なった合字。
- G) 3) quicquamは末尾の-uamがセミコロンのようなものとその上の横棒で示されている。比較的よく現れる綴りの略字。
- H) 6) estの場合は鼻母音ではなく語尾-st省略。
- I) 1) responderuntの語幹のかなりの部分-espo-が省略B)され、さらに語尾の一部のnが省略A)されたもの。この場合のように語の中間部をかなり省略するのは、respondeo「答える」といった使用頻度の高い語に限られるのではないかと思うが。
- 6) dominus 頻出する語で語幹の-omi-と語尾のuも省略。B)参照。その他の格については以下のd)を参照。

以下の文法事項の説明に関しては、参照箇所を便宜的に白水社のCDエクスプレスシリーズ『ラテン語』(岩崎務著)によって、同書の課と解説項目の番号で[ ]に示す。例: [1-2]=同書1課の解説の2番目の項目「動詞の現在形」を参照<sup>4)</sup>。語彙に関しては、英語・フランス語で関係するものを(英仏)としてできるだけ示す。>は直接の由来ではなく、他の品詞などからの間接的な由来を示す。→によって辞書の見出し語形。動詞は現在1人称単数で示す。以下、括弧の数字はグーテンベルク聖書の引用箇所行数で、括弧の大文字アルファベットは上に挙げた文字の縮約・略字の説明のそれである。文法事項はより基本的と思われるものを先にあげる。綴りに関しては以下、iとj、uとvは今日の一般的な表記による。

- a) 今日のコロンにあたる縦に二つ並んだ点は、今日のコンマないしセミコロンか。ピリオドは同じ。
  - b) 文の始めは大文字であるが、人名は小文字で始まっている。
- 1)laban, bathuel 4)rebecca 7)abraham

- c) 1) 5) et ④et ⑤and  
 d) 第2変化名詞 [3-2]  
 6) dominus 「主、主人」 (>⑤dominant)  
 5) domini 属格 8) dominum 対格  
 2) domino 奪格  
 5) filii → filius 「息子」 (④fils) の属格  
 3) placitum 「喜び」  
 e) 前置詞 [6-2, 4]  
 2) a 3) extra (>⑤extra) 4) coram  
 8) in ⑤in  
 f) 人称代名詞 [4-3]  
 4) te ④te 4) tecum は te と前置詞 cum の融合形。  
 g) 形容詞 [3-3]  
 5) tui → tuus  
 h) 指示代名詞 [13-2]  
 3) ejus 5) eam  
 i) 動詞 [2-2, 3]  
 2) 4) 6) est ④est ⑤is → sum  
 3) possumus → possum (④pouvoir ⑤can) の  
 1人称複数形  
 j) 第2変化名詞 [5-2]  
 7) puer 「少年、下僕」 (>⑤puerile 「子供っぽい」)  
 k) 第1変化名詞 [1-4]  
 8) terra 「地」 ④terre  
 l) 第3変化名詞 [7-1]  
 2) sermo 「話し」 ⑤sermon  
 5) uxor 「妻」 (>⑤uxoriosis 「妻を溺愛する」、  
 uxoricide 「妻殺し」)  
 m) 動詞の完了 [8-2, 3]  
 1) responderunt → respondeo (⑤respond) の完了  
 3人称複数  
 7) adoravit → adoro (⑤adore) の完了 3人称単数  
 n) 命令形 [11-2]  
 4) tolle → tollo 「取り上げる、持ち去る」  
 o) 能動形欠如動詞 [15-1, 14-1, 16-1]  
 2) egressus → egredior 「出て行く」の完了分詞  
 [16-2]。egressus est は受動態完了時制の形であるが、  
 能動形欠如動詞は受動的な意味はもたない。  
 4) loqui → loquor 「話す」 (>⑤eloquent) の不定詞  
 6) locutus → loquor 完了分詞 [16-2]  
 5) proficiscere → proficiscor 「出発する」の命令形  
 2人称単数

- p) 現在分詞 [17-1]  
 6) procidens → procido 「ひれ伏す」  
 q) 接続法 [18-1, 2]  
 5) sit → sum の接続法現在 3人称単数。願望を表す。  
 6) audisset → audio 「聞く」 (>⑤audio) の接続法  
 過去完了 3人称単数。audivisset [20-1] の別形で  
 -vi が脱落したもの。  
 r) その他  
 2) non ④ne ⑤not  
 3) quicquam → quisquam 「どの…も、どの…も  
 (ない)」  
 3) aliud → alius 「他の」 (>⑤alien)  
 4) en 「ほら」  
 6) sicut 「…のように」  
 6) quod → qui 関係代名詞単数中性対格で前の  
 文章を受けて「それを」。  
 6) cum 「..のとき、…すると」

ウルガタの英訳として、原典からすれば重訳になるが、ドゥエ・ラーンス(リームズ・ダウイ) Douay-Rheims 版(新約1582、旧約1609-10)がある<sup>5</sup>。カトリック側の最初の英訳であり、欽定訳に先行してこれに影響し、原典を参照しつつもウルガタの忠実な訳という。底本は初め別の版に拠ったが、後にはカトリックの公認版となるクレメンヌ版に合わせている。グーテンベルク聖書の本文理解のために以下に対比させて掲げる。

中世、ロマンス諸語が話されていた地域(フランス・イタリア・スペインなど)では、ゲルマン諸語(英語・ドイツ語など)に比べると、言語がラテン語との隔たりが小さかったために、聖書の翻案や翻訳に関する動きは鈍かったという<sup>6</sup>。「十九世紀末以降フランスでもっとも普及したのはレイ・スゴンの訳であり、…現代版ルター訳や欽定訳のように…公的な訳になった…現在普及しているのは…すでにレイ・スゴンそのものからは、かなり離れている」<sup>7</sup>が、ここではその現代版を掲げる。底本はウルガタではなく原典からであるが、グーテンベルク聖書の本文理解のために参考にはなると思われる。

上段はグーテンベルク聖書1455頃(G)、中段はドゥエ・ラーンス版 1609(D)、下段はレイ・スゴン訳の現代版 2002(S)である。

50節前半

Responderunt laban et bathuel. A domino egressus est sermo. (G)  
 Laban et Betouel répondirent : Cette affaire vient du Seigneur, (S)  
 And Laban and Bathuel answered : From our Lord the word hath proceeded : (D)

50節後半

Non possumus extra placitum ejus quicquam aliud loqui tecum.  
 nous ne pouvons rien t'en dire, ni pour ni contre.  
 we can not speake any other thing with thee besides his pleasure.

51節前半

En rebecca coram te est : tolle eam et proficiscere :  
 Rébecca est là, devant toi ; prends-la et va-t'en ;  
 Behold Rebecca is before thee, take her and goe thy waies,

51節後半

et sit uxor filii domini tui : sicut locutus est dominus.  
 qu'elle devienne la femme du fils de ton maître, comme le Seigneur l'a dit !  
 and let her be the wife of thy lords sonne, as our Lord hath spoken.

52節

Quod cum audisset puer abraham : procidens adoravit in terra dominum.  
 Lorsque le serviteur d'Abraham entendit cela, il se prosterna jusqu'à terre devant le Seigneur.  
 Which when Abrahams seruant heard, falling downe he adored our Lord to the grounde.

ここで本文の考察に入る前に、主にウルガタ旧約の写本・刊行本・翻訳などについての略年表を掲げておく。

4-5世紀	ヒエロニムス「ウルガタ」。
7-8世紀	7世紀に西欧全域に及び、8世紀の終わりには西欧で最も利用される。
700頃	アミアティヌス写本 (ウルガタの完本最古)
1008	[レニングラード写本(旧約原文完本最古)(Heb)]
1452-55頃	グーテンベルクがウルガタを印刷(G)
1545	[ルター訳(生前最終版)(L)]
1545-63	トリエント公会議 (ウルガタの権威を確認)
1592	(シクストゥス=)クレメンズ版 (1979年までカトリックの公認版)(C)
1609-10	ドゥエ(・ランス)版英語旧約(D)
1611	[欽定訳(イギリス国教会)(AV)]
1969	シュトゥットガルト版ウルガタ(St)
1979	新ウルガタNova Vulgata(NV)

「ウルガタ訳の価値は、聖書の原本の再現を目指す聖書の本文批判の観点からよりも、むしろ西欧キリスト教およびその文化への影響の観点から計り知れないものがある」とされる。今日ではヘブライ・ギリシア原文のほうに本文批判の重点が置かれるのは当然であろうが、本論で扱った箇所の中にも語句の異同が含まれているので、専門家が写本レベルで比較するのを

まねて、刊本レベルで少し比べてみたい。

50節後半のグーテンベルク聖書(G)とドゥエ版(D)をルイ・スゴン訳(S)と比べてみると、ここではウルガタが原典から離れるか意識をしているように感じられる。また(D)の52節はじめのwhichは51節全体を受けると考えられ、その後接続詞のwhenが続いている。今日このような構文がどの程度自然であるのかわからないが、この部分はまさにウルガタの「言葉を一語一語、逐一誠実に対応させ」<sup>9</sup>quod cumをそのまま英語に写した感じであろう。

以下、52節の後半「(アブラハムの僕は)地に伏して主を拝した」の部分の少し詳しく見ていく。まずウルガタで、グーテンベルク聖書(G)、クレメンズ版(C)、シュトゥットガルト版(St)を比べてみる。

procidens adoravit in terra dominum(G)  
 procidens adoravit in terram Dominum(C) (NV)  
 adoravit in terra Dominum(St)

グーテンベルク聖書(G)では動詞は二つ。「前に倒れる、伏す」procidoを現在分詞で、「崇める」adoroを述語動詞で。「地」terraには対格・奪格をとる前置詞「中、に」inがつくが、ここでは奪格支配。「主」dominusは対格になっている。クレメンズ版(C)では動詞に関しては(G)と同じ。ただし前置詞「中、に」inが「地」terraの奪格ではなく対格をとっているため、この前置詞句は「伏す」procidensという現在分詞にかかっていると考えていいのであろう。シュトゥットガルト版(St)では、(G)(C)にあった「伏す」の分詞が削除され、前置詞inは(G)と同じ「地」の奪格をとっている。分詞がないので、前置詞句はもうこれにかかることは

ありえず、述語動詞の行為が行われる場所を示すこと  
に  
なるか。なお(St)は語句の異同欄(apparatus criticus)に  
(C)の読みを入れているので、「伏す」の分詞procidens  
を写本の注か書き込みとみなしたか。

ウルガタに忠実な訳とされるドゥエ版(D)は、初版  
(上段)と1899年版<sup>10</sup>(下段)で多少異なる。

falling downe he adored our Lord to the grounde  
falling down to the ground he adored the Lord  
「伏す」の分詞はこの訳でも分詞として訳されている。  
1899年版は「地に」をこの分詞にかけているのは明らか  
であるが、初版のほうはどうなのか私にはよくわから  
ない。

ヘブライ語は右から左に書かれる。

**וַיִּשְׁתַּחוּ אֶרְצָה לַיהוָה**

ヘブライ語聖書対訳シリーズ1「創世記」(ミルトス・  
ヘブライ文化研究所 1990)の逐語訳は「そして彼はひ  
れ伏した」「地に」「主に」である。用いられている動  
詞はひとつである。辞書にはこの動詞שָׁחַחの訳語とし  
て「ひれ伏す、額づく」「*bow down, prostrate oneself*  
(before God, in worship, etc.)”とある。「地に」は  
「地」אֶרֶץという名詞に方向を示す接尾辞が付き、「主  
に」は「主、ヤハウエ、Yhwh」יְהוָהという名詞に方向  
を示す接頭前置詞が付く。

前稿で扱ったルター訳は構文に関してはウルガタよ  
りも原典に近い。1545年版(上段)と1984年版(下段)で  
多少異なる。

bücket er sich dem HERRN zu der erden (L)  
neigte er sich vor dem Herrn bis zur Erde  
1545年版では、動詞は再帰代名詞とともに「身をか  
がめる」といった感じのbücketひとつ。「主」Herrは与格  
(3格)、「地」erde(Erde)には前置詞「に、へ、で」zu  
がつくが、これは支配する格が決まっている。なお現  
代版では動詞が異なるほか、「主」Herrの前に前置詞  
「前に」vorが加えられている。

欽定訳も原文に拠っているはずである。

he worshipped the LORD, *bowing* himselfe to  
the earth (AV)

1611年の欽定訳はゴシック体の本文中ヘブライ語原文

にない単語がローマン体になっているが、ここでは  
*bowing*がそれに該当する。原文にないということ  
でこれを無視すれば動詞はひとつということになるが、  
分詞を補っているのはウルガタの影響のようにも感  
じられる。

動詞とその目的語などの関係が気になってあれこれ  
記したが、同じ言語でも時代や地域によって、例え  
ば与格が対格に代わって用いられたり、前置詞の格  
支配が変わったりといった違いが生じることは考  
えられる。言語が違えば格の体系も違って来る  
から、一律に記述した感じは否めないかもしれ  
ない。前に、あるいは下に、落ちて、あるい  
は倒れて、身をかがめ、伏す。頼み、ある  
いは懇願し、拝み、崇拝する。「～に」な  
のか「～を」なのか「～へ」なのか、「上  
に」なのか「前に」なのか「下に」な  
のか、なかなか言葉は難しい。複合動  
詞だがあえて一つに絞るなら「主を地に伏し  
拝む」というのはどうか。

#### 注

- 『新カトリック大事典』(第1巻)研究社 1996, 「ウルガタ訳聖書」の項, p.705。またC.ハメル『聖書の歴史図鑑』東洋書林2004, p.200。
- <http://www.gutenbergdigital.de/gudi/start.htm>。ゲッティンゲン大学所蔵のグーテンベルク聖書genesis 15rによる図版。慶応大学、大英図書館なども所蔵するグーテンベルク聖書のデジタル画像を公開しているが、画像の解像度は劣る。
- 20課からなるこの簡便な入門書の最初の数課は読了済みと想定して説明。
- 引用は復刻版(臨川書店1990)による。その解説によれば1749-52にR.Challonerによって大幅な改訂が行われており、これがドゥエ版として流布したが、その名で呼ばれるにはふさわしくないという(水垣渉)。
- 『新カトリック大事典』(第3巻)研究社 2002, 「聖書の翻訳」の項。
- 田川健三『書物としての新約聖書』勁草書房1997, p.527f。
- 『新カトリック大事典』(第1巻)研究社 1996, 「ウルガタ訳聖書」の項, p.703。
- B.ボブリック『聖書英訳物語』柏書房2003, p.151が引用するドゥエ・ランス版の序文より。
- <http://www.drbo.org/>